

の永い歴史が刻まれており、今回の調査でその一端が明らかにされたことは意義深いものであったと言えよう。

## Ⅱ 藤井平における弥生文化の波及について

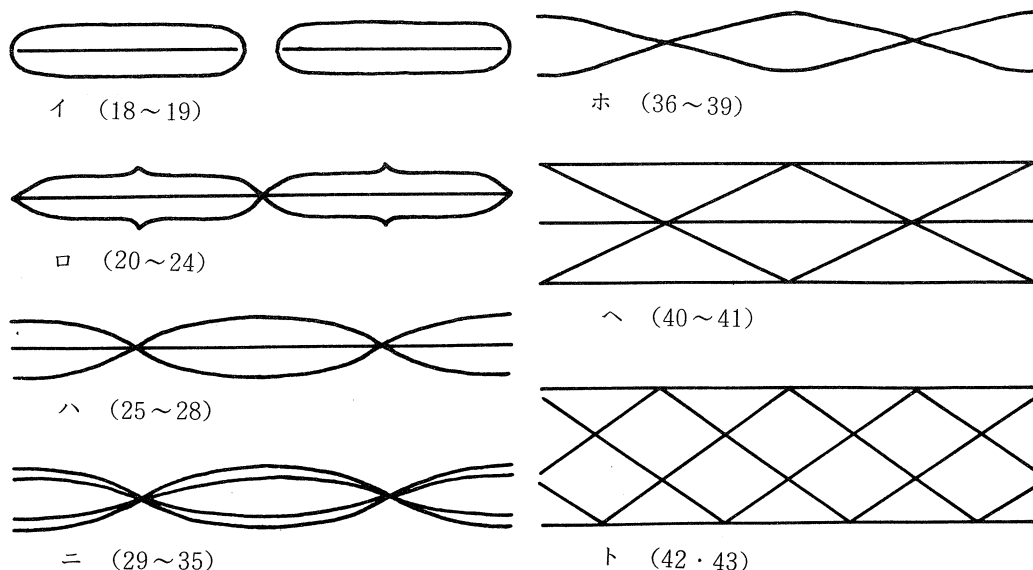
中道遺跡遺構外出土遺物のうち第8群土器とした土器群について、その編年的位置づけを概観し、藤井平における弥生文化の波及をみてみよう。

### 1 編年的位置づけ

1類は、浮線網状文を指標とする土器群で、三分した口縁部形態についてみると、a種は、長野県氷遺跡第Ⅰ群土器・長野県御社宮司遺跡晩期第Ⅱ群土器などに類似し、b種は、長野県女鳥羽川遺跡出土土器・長野県離山遺跡第8類土器に求められる。c種は、御社宮司遺跡・氷遺跡にみられ、長野県トチガ原遺跡出土土器に顕著である。このc種は、僅かの例外を除いて、頸部無文帯を形成するという特徴が認められる。

また、文様モチーフについて眺めてみると、工字状文の施される1は東北地方晩期後葉大洞A式の特徴を表わしている。15~17も同様であろう。2の内外面に三角形の挟り込みを伴う突起を連ねた波状風の口縁は、愛知県佐野遺跡出土の広口壺・長野県満島遺跡出土の壺などに類似したものがあ、東北地方晩期後半大洞C2~A式に目立ったものである。3~12・14にみられる眼鏡状浮文(連続する浮線楕円文)を特徴とする例は、長野県女鳥羽川遺跡出土土器に類例が求められ、中部地方晩期後葉氷Ⅰ式土器に先行するものととらえられている。13の突起間を浮線でつなぐ文様も同じ範疇に入ろうか。

浮線網状文は、概ねイ~トの7種類に分けられる。これらは中部・関東・東北地方の氷Ⅰ式・大洞A~A'式土器に多用される。先学諸氏の研究の成果に因って、類例を拾ってみよう。



第46図 浮線網状文土器文様モチーフ

イは、茨城県殿内遺跡殿内BⅣ式土器にみられる。ロは、群馬県千網谷戸遺跡・長野県御社宮司遺跡・長野県氷遺跡出土土器などにみられ、関東・中部・北陸・東南北部の広範囲に分布するようである。ハは、長野県離山遺跡・長野県荒神沢遺跡出土土器、ニは、長野県トチガ原遺跡出土土器などにみられ、これらは愛知県二反地遺跡・静岡県山王遺跡など東海地方においても少数ながら出土土器片に認められるようである。ホは、神奈川県杉田遺跡D類土器・千葉県荒海貝塚出土土器などにみられる。特に38についてみると、小波状口縁を呈し、山と山の間は楕円形の凹により口外帯(?)を形成しており、頸部文様帯は浮線によって菱形を描き出しているが、菱形と平行浮線によって作り出される隅円三角(蒲鉾)地帯には刺突が充填され、胴部上半は浮線網状文、胴部下半は条痕文とその中に稲妻文を垂下させるものである。このような形態を表わす類例を見い出せなかったが、個々にみれば、楕円形凹を有する小波状口縁部は氷遺跡第Ⅰ群土器・御社宮司遺跡晩期第Ⅱ群第Ⅰ類土器の浅鉢などに類例がみられ、刺突を除いて平行浮線間に浮線で描き出される菱形文は中部地方を中心に分布している。胴部上半の浮線網状文、胴部下半の稲妻文をともなう条痕文 ― 本遺跡では主に3類に入れた ― は、やはり氷遺跡・御社宮司遺跡出土土器にみられる。ヘは、新潟県鳥屋遺跡出土土器に、トは、長野県氷遺跡・長野県御社宮司遺跡出土土器などにみられ、愛知県檜王遺跡出土土器にも僅かに類例がみられる。ホ・ヘ・トは、単一または段を重ねたりする例がある。45は、浮線部に細線が施されるもので、群馬県千網谷戸遺跡出土土器に近似した例がある。44は、沈線文であり、1類の中では新しい様相を呈するのであろうか。

以上1類とした土器群についてみてきたが、これらは中部地方氷Ⅰ式、東北地方大洞A式期に併行するものであり、その前後の様相を呈するものを若干含むものの、縄文時代晩期後葉後半に位置づけられよう。

2類は、沈線・隆線帯を有するものである。深鉢のうちa種は、金生遺跡2号配石出土の胴部上半肩部が「く」の字形に屈折する形態の深鉢に器形を求められるであろう。新津健氏は、その土器の祖形を北九州地方夜臼式に求め、中山誠二氏は、北九州地方山ノ寺式～夜臼式単純、近畿地方滋賀里Ⅳ式、東海地方五貫森式に併行するものとした。これらは縄文時代晩期中葉後半期に位置づけられ、これによればa種は本類の中で古相を呈するものと言えよう。

一方a種以外の、口縁部に1条～4条の沈線・隆線帯がめぐる深鉢・浅鉢等は、長野県離山遺跡・長野県氷遺跡・長野県荒神沢遺跡・長野県御社宮司遺跡出土土器などに類例がみられる。また、口径の小さなものをここでは壺としたが、46のような口縁部が内傾する形態のものは、長野県御社宮司遺跡出土土器などにみられる。口縁は平縁、突起のつくもの、凹みが施されるものなどがあり、口縁部形態を含めいずれも前記の長野県各地の遺跡出土土器に類例がみられる。本類とした無文土器も同様である。ただし、浅鉢の内c種としたものは、群馬県千網谷戸遺跡出土土器に類似したのがあり、古相を呈するのかもしれない。

いずれにしても、2類とした一群の土器は、中部地方氷Ⅰ式の範疇に入るものであろう。

3類は、東海地方西部に脈絡をもつ条痕文土器である。1～8にみられる口縁に沈線・隆線帯がめぐる形態のものは、愛知県下り松遺跡出土半精製土器・神奈川県杉田遺跡出土粗製土器に類例がみられる。口縁に無文部位がありそこから下部に条痕を施すもの(19～29)は、愛知県西浦遺跡出土土器に類似がみられる。条痕の方向は、口縁部付近は横位、胴部は斜位の傾向が窺えるが、9に代表される縦方向の条痕文は東海地方西部樫王式の段階になって出現する。しかしながら、樫王式に顕著とされる口縁端部の面取り手法は、本類には少ないようである。31～39にみられる稲妻文乃至蛇行文は、長野県氷遺跡・長野県御社宮司遺跡出土の深鉢に類似し、神奈川県杉田遺跡出土粗製土器にも若干認められる。30は口縁部が外反し、口唇部に指頭圧痕を施すもので本類の中では後出的なものであろう。

3類は以上のように純然たる樫王式とは言えないが、東海地方西部に祖源をもち、樫王式に併行する一群ととらえておきたい。

4類は、凸帯文土器の一群である。口縁内面に横位の条痕が施されるもの(2・3)、口縁端部が面取りされるもの(8・9)などがあり、いずれも口縁部に指頭圧痕等による刻目をもつ太い凸帯がめぐる。この凸帯は樫王式に特徴の断面三角形状を呈するものではなく、本類は東海地方水神平式に併行するものであろうか。

以上第8群土器について類別に編年の位置づけを試みてきたが、次に県内における縄文時代晩期後半～弥生時代中期初頭のなかでどのように位置づけられるのかみてみよう。

## 2 山梨県における土器の推移

本県における弥生文化波及期の研究は、県内における縄文時代晩期後半～弥生時代中期初頭の遺跡を網羅した中山誠二氏の詳細な論考があり、それを参考に八ヶ岳山麓・甲府盆地周辺といった近隣地域と本遺跡出土の土器を簡単に比較してみよう。

大泉村金生遺跡2号配石は、工字状文を有する浅鉢、北九州地方夜臼式に脈絡のある肩部が「く」の字形に屈折する深鉢、東海地方西部五貫森式併行の浅鉢、中部地方氷1式の深鉢などが出土し、縄文時代晩期中葉後半～後葉前半に位置づけられる。同じく金生遺跡A地区17号住居址出土土器は、浮線網状文の施される土器、凸帯文土器、口縁部に沈線・隆線帯のめぐる深鉢などで特徴づけられ、中部地方氷1式・東海地方西部樫王式に併行するものととえられ縄文時代晩期後葉後半に位置づけられる。長坂町柳坪遺跡A地区16号住居址出土土器は水神平系条痕文土器を主体とするものであり、敷島町金の尾遺跡出土土器は水神平式条痕文土器であり、縄文時代晩期終末～弥生時代中期初頭の過渡期に置かれる。これらに続く弥生時代中期初頭の遺跡は、八ヶ岳南麓では大泉村寺所遺跡2号土壇、甲府盆地周辺では中道町米倉山B遺跡が位置づけられている。

本遺跡出土の第8群土器は、1で述べた如く東北地方大洞A式、中部地方氷1式、東海地方西部樫王式～水神平式に位置づけられるものであり、金生遺跡2号配石出土の縄文時代晩期後葉前半期の土器に続き、同A区17号住居址出土土器にはほぼ併行する位置づけがなされよう。

また、甲府盆地西北端を占める本遺跡の立地場所から言えば、金の尾遺跡に先行するものとして位置づけられようか。

ここで中山氏の提示した縄文時代晩期後葉～弥生時代中期初頭の土器編年に本遺跡を組み入れてみると、八ヶ岳南麓では金生遺跡2号配石－金生遺跡A区17号住居址－柳坪遺跡A地区16号住居址－寺所遺跡2号土壇と変わらず、甲府盆地周辺では未だ縄文時代晩期後葉前半を空白とし、中道遺跡－金の尾遺跡－米倉山B遺跡という変遷過程がたどれることになるのである。

次に、本遺跡出土第8群土器の編年的位置づけを踏まえて、本遺跡の所在した藤井平における弥生文化の波及を考えてみたい。

### 3 藤井平における弥生文化の波及

本県における弥生文化の伝播は、八ヶ岳山麓及び富士山麓を越えて入ってくる2つのルートが考えられており、峡北地方においては、東海地方西部の条痕文を主体とする土器をもつ文化が、天竜川沿いに伊那谷を北上し八ヶ岳山麓へ至るというものである。

このルートによって、峡北地方（八ヶ岳南麓）においては、金生遺跡2号配石出土土器にみられるように、東北地方大洞C2式段階に西北九州で始まった弥生時代に使用された土器の影響が見い出され、縄文時代晩期後半には弥生文化の洗礼を受けていたと思われる。

この縄文時代晩期後半における遺跡の立地は、低湿地を包含する低地、尾根に挟まれた谷などに所在する傾向があり、これは多分に水稻耕作になかった立地条件ではあったが、八ヶ岳南麓ではまだ定着するには至らなかった。それは中山氏の指摘しているように、八ヶ岳南麓などの高所は現在もそうであるように当時においても寒冷地であったため、水稻に対しては劣悪な気候条件となりその定着を許さなかったことによるものである。水稻耕作に代表される弥生文化を受け入れるには、該地ではいましばらくの時間が必要であった。

八ヶ岳南麓に入った弥生文化の波は、東北地方大洞C2式に続く大洞A式・中部地方氷I式の段階には八ヶ岳台地下の藤井平に及んで来た。ほぼ同時期の金生遺跡A区17号住居址は石囲いの住居址であり、金生遺跡全体を眺めてみると配石などの祭祀遺構があり、特殊なあり方を示してはいるものの、石を用い石を主体とした集落構造が窺える。しかし、本遺跡では第8群土器に伴い配石と認められるような遺構は検出されず、遺構としての石の使用はまったく無かったと思われる程であり、また、条痕文土器を出土した4号住居址は石を使用しない単なる竪穴式住居址となっている。これはどういうことを物語っているのだろうか。

縄文時代晩期中葉後半大洞C2式段階で弥生文化が八ヶ岳南麓に波及したが、それはそれまでの縄文文化を凌駕するには至らず、縄文時代晩期後葉になっても、なお、当該地域は、石囲い住居址にみられるような、縄文時代後晩期に特徴的な石を主体とした縄文文化の延長線上にあるものであった。ところが、藤井平においては、縄文時代晩期後葉の段階には、塩川右岸の氾濫原である肥沃な低湿地を背景として、恵まれた自然条件のなか、遺構に石を使用することに象徴される縄文文化の伝統を切り捨て、水稻耕作が進展していったものと考えられ、弥生文

化は急速に普及・定着していったととらえられるのである。すなわち、藤井平においては、ハケ岳南麓を中心に展開される縄文文化に決別し、いちはやく水稲耕作を導入し開墾の手が入ったのであり、遺構にみられる形態差がそれを如実に反映しているのである。そして、この弥生文化の波及・定着への一大画期が、藤井平においては縄文時代晩期後葉後半にあったと考えられるのである。

#### 4 おわりに

中道遺跡出土の縄文時代晩期後半～末葉の土器群について、編年的位置づけを検討し、藤井平における水稲耕作に代表される弥生文化の波及を考えてきた。しかし、その編年的位置づけは、土器群の詳細な分類を含み今後さらに検討の必要があろう。編年を踏まえた藤井平における弥生文化の波及も尚再考を要するものである。また、該期においては、土器組成の変化が如実にその背景となる文化の変容を映し出すとされるが、本報告においては器種構成が明確にされず、土器組成の面からの比較検討がなされず非常に曖昧なものとなってしまったことを深く反省する。さらに、直接に生産活動にかかわるような遺物（生産用具）等についても言及がなされず、今後に残された課題は大きいと言えよう。しかしながら、本資料は甲府盆地周辺部における弥生文化の波及・定着を考慮する上で貴重な一石を投ずるものと信じる。先学諸氏の御批判を賜りたい。

なお、文章中には註をつけなかったが、引用・参考文献として別にしめす。

最後に、本報告書を執筆するに当たり、文献・助言等でお世話になった、末木健・新津健・小野正文・山路恭之助・深沢裕三・中山誠二・畑大介・櫛原功一の各氏に厚くお礼を申し上げます。

#### 〔引用・参考文献〕

- 川勝政太郎 『日本石造美術辞典』 東京堂出版 1978
- 土井 卓治 「石塔の民俗」『民俗民芸双書』73 岩崎美術社 1972
- 坂本 美夫 「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古 第21号 シンポジウム  
古代末期～中世における在来系土器の諸問題』神奈川考古同人会 1986. 2
- 田口 昭二 「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『月刊考古学ジャーナル』臨時増刊号No.211  
ニューサイエンス社 1982
- 杉原荘介・戸沢充則 「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』第2巻第  
1号
- 永峯 光一 「水遺跡の調査とその研究」『石器時代』No.9
- 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎 「茨城県殿内（浮島）における縄文・弥生両時代の遺跡」  
『考古学集刊』第4巻第3号
- 大参 義一 「縄文式土器から弥生土器へー東海地方西部の場合ー」『名古屋大学文学部研

- 藤沢宗平ほか 『離山遺跡』 長野県安曇郡穂高町教育委員会 1972
- 安孫子昭二 「縄文式土器の型式と編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 有斐閣選書 1978
- 春成 秀爾 「縄文時代の終焉」『歴史公論 2 縄文時代の日本』第5巻2号 雄山閣 1979
- 戸沢 充則 「縄文農耕論」『日本考古学を学ぶ』(2) 有斐閣選書 1979
- 小林秀夫・百瀬長秀ほか 「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 茅野市その5』 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会
- 設楽 博己 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号
- 第4回三県シンポジウム 『東日本における黎明期の弥生土器』 北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究会・群馬県考古学談話会
- 百瀬 長秀 「浮線文系土器の変遷と分布」『歴史手帖』14巻2号 名著出版 1986
- 座談会 「ハケ岳南麓・金生遺跡と縄文晩期の地域的諸問題」『季刊どるめん』29 1981
- 新津健 「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館  
山梨県埋蔵文化財センター 1983
- 新津健 「ハケ岳南麓における縄文後・晩期の遺跡について」『甲斐考古』21-2 1984
- 中山誠二ほか 「〔座談会〕山梨県考古学の現状と課題」『甲斐路』季刊No.52 1984
- 中山誠二 「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要』2 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター 1985
- 鈴木義昌編 『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』 河出書房新社 1966
- 和島誠一編 『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』 河出書房新社 1966
- 澄田正一ほか『新編一宮市史 本文編上』 1977
- 芹沢長介・坪井清足監修 『縄文土器大成』第1巻～第4巻 講談社